ASEE レポート（No,20）

私の仕事の思い出

一般社団法人　シニア･環境技術支援協会
川俣　深

私の最初の辞令は入社面接では研究部門を希望したはずが､「サービス課」であった｡「サービス課」は納入施設のアフターサービスを担当する部署で、新人は他の部署でＯＪＴ教育を受ける習わしであった。思い返すと研究部門ではなく、このサービス課配属がその後いろいろな仕事を通じて水処理の面白さ、難しさを体験させてもらうきっかけとなった。これまでの水処理体験をあれこれ振り返ってみたい。

１．開発･設計･試運転時代

入社後、現場での出張作業もＯＪＴ教育の一環であった。最初の出張は入社後ぼんやり過ごしていた 5 月の連休明けに突然命令され、当時は仕事のことは二の次で出張できることが嬉しかった。

最初の出張は東海地方の某自動車工場（本社工場）の廃水処理施設の実施設計の現地調査であった。その後多くの地域で廃水、汚泥等の現地処理試験、運転に関わったが、最初は作業操作の目的もあまり理解できず、要領も悪い自分に比べて、当たり前だが、淡々と作業をこなす先輩の手際の良さに感心する毎日であった。当時の先輩、上司も手を焼いていたことだろう。

①　浄水（上水）処理

入社以来、廃水関連の出張業務を楽しんでいた（？）S46 年、別の部署の責任者から誘われ「開発プロジェクトチーム」に配属となった。チームは当時 6～7 名の小グループであったが、オゾン、活性炭、し尿の高度処理、脱塩など将来のニーズに応えるための業務を行っていた。｢何で私が」と思ったが、チームリーダが同郷(鹿児島)の私に目を付けたのだろう。しかし、ここでも先輩・上司をてこずらせた。

当時のチームリーダは熱血漢で瞬間湯沸かし器と言われるくらい短気（怒られている本人よりも事務室の端っこの席にいる社員が怖がるほど）であった。しかも超巨人ファンときているため、巨人が負けた翌日はいつでも外に飛び出せる営業担当を羨ましく思ったこともある。ただ、面倒見のいいリーダであり、期待（？）に反して成長はしなかったものの今でも愛のムチとして感謝している。

私の所属の脱塩チームは海水（塩水）の淡水化装置(電気透析)の実用化を目標に、国内の某イオン交換膜メーカと技術提携し各種の基礎実験に着手していた。

海水淡水化の第１号機はＳ県Ａ市の沖合にある島に設置したもので、ここへは実装置計画のための現地試験から、建設・試運転、運転指導、異常処理対応等で数年間通い、第二

の故郷と言ってもよい。この脱塩装置はその後、海底送水管の敷設と地震による損壊で役目を終えている。

第 2 号機は、Ｔ県Ｉ市の民間工場の工場排水を脱塩再利用するもので、数年稼働したが原水水質管理の難しさと運転管理費の問題から間もなく運転休止された。

第 3 号機は、Ｏ県の本島から更に飛行機で 1 時間以上もかかる離島の海水の影響を受けた飲用水源（池）の脱塩処理であった。電話が通じにくい上に、交通事情も悪く、客先ものんびりしたもので、会社の上司も容易に現地を訪れないこの島で、仕事の傍ら自由を満喫した時期でもあった。当施設はその後逆浸透（RO）装置と入れ変わったが、現在の状況は不明である。

以上のように、年月が経過したとはいえ、開発業務で携わった脱塩装置が現在１ヶ所も実在していないのは寂しい限りである。

また、イオン交換膜脱塩装置は浮遊物質（SS）による膜閉塞を防止するため、原水の前処理には相当な苦労をしたが、その後技術の進展に伴い、し尿処理に膜が利用されようとは当時の状況から想像もできない驚きであった。

この脱塩チームも自然消滅して、上水チームに配属され、その後は荏原の急速ろ過装置の代名詞でもあるグリーンリーフフィルター（ＧＬＦ）の設計、試運転を中心に担当することになった。ここで多くの上水装置の設計・試運転を経験したことはその後、いろいろな面で役立った。

② 廃水処理

浄水（上水）関連の業務のあと廃水設計部門に配属された。最初の設計はＤ開発（株）が次世代のエネルギー用として開発していたプラントのなかの一処理施設で、おもちゃにすぎないような施設にもかかわらず、客先担当官は他の施設と同様に理不尽（？）な検査を要求する技師であった。

当時は要求の高さ（こちらの程度が低かったに過ぎないが）に癖々したが、要求の厳しい客先との接触を若いうちに経験したことで、その後の設計業務遂行に役立ったことは言うまでもない。

廃水処理で思い出すのは、加圧式ろ過装置の試運転中の破損事故である。特殊仕様の急速ろ過装置（5m径程の回転表洗管付圧力式ろ過機）ではあったが、空気抜き管の口径が小さく、逆洗排水（通常の排水量より多量の洗浄廃水を必要とした型式）工程中にろ過器内が負圧になり、ステンレス製のろ過器を真空でペシャンコにした苦い経験である。

逆洗工程中にろ過器が少しずつへこんで、内部の回転表洗管がカタカタ音を立てていった光景は今でも忘れられない。（中央操作室では客先担当者も報告を受け、「そんな馬鹿な」ときょとんとしていた）

設計担当者は運転ミスと指摘し、こちらは設計不良を主張した。こちらの案で改造したが、再開時の運転釦を押すのが怖かった。幸いに全てのろ過機に改造を施し、問題を解決して客先に引き渡した。親会社が改造費用は負担したが、私は会社に大きな損失を与え、試運転前に現場で設計ミスを見いだせなかったとして、会社のトップから叱責を受けた上、ろ過器を壊した張本人として有名（？）となった。

廃水処理時代は、水質分析、処理試験、運転、運転指導、取説作成、引渡しと現地での一人作業が多かったが、浄水、下水処理に比べて変化があり大変面白く、好んでこの分野の試運転を引き受けた。ただ、冬季の試運転が不思議と日本列島北部の寒冷・降雪地域が多く、寒さと降雪・凍結に悩まされたことを記憶している。

③ 海外での試運転

海外は仕事で 4 回、廃棄物施設視察で 2 回経験した。プライベートでは息子の結婚式に渡豪しただけで、行楽シーズンに国外脱出のニュースを見聞きするたびに、家族の前では小さくなっている。

初めての海外出張はＩ社がアルジェリアに建設したＬＮＧ製造プラントで、当社の範囲は廃水、衛生処理設備の建設工事、試運転、運転指導であった。国内での会議ではＩ社は専門担当者が入れ替り出席するが、こちらは設計一人で、相手の専門的知識にうまく対応ができない歯がゆさを感じたものである。

フランス語圏のために、設計図書も取扱説明書も全てフランス語に翻訳してもらうが、日本語であれば構えることもない設備でも、横文字だけで非常に難しく思え、文字に振り回された思いがあった。

現地では英語が通じるものの、英会話さえもろくにできない者がスーパーバイザ（ＳＶ）として現地に赴いたのも大した度胸とも思えるが、多くの日本技術者の滞在が救いであった。

約半年滞在後、帰国の許可が出たとき、やり残した仕事（最終運転確認、運転指導）があったが、「残留を申し出るといつ帰国できるか分からない、フランスに渡ればシメタモノ（呼び戻しはない）帰りなさい」と現地の関係者にアドバイスされ、後ろ髪をひかれる思い（？）で即フランスに飛び立った。

ところが、この頃、東京の本社は経営難で大リストラを実施中で、現地では他人事であったが、私も帰国 2 日目に子会社（EES）に出向を言い渡され、苦い思いをした。

2 回目の海外出張は、Ｓ社が中国に納入したビール製造工場の廃水処理であった。「1 日のＳＶ費用が中国の労働者を約 300 人雇える金額で、早く仕上げて帰国してくれ」との申し出があり、現地労働者のスローペースに悩まされながらも、最後は他の日本人技術者に託して約 3 週間滞在で早々に帰国した。

3 回目は、台湾での高速凝集沈殿装置の運転不具合に伴う運転指導であった。原因と対策を、あらかじめ日本から情報提供したうえで現地に赴いたが、客先の事情で当該設備の運転ができず、目的を果たせず帰国することになったが、客先の配慮で台湾の観光や台北での高級クラブでの歓待でいい思もした。

4 回目はシンガポールの大規模下水処理場の試運転に従事する社員の引率であった。業務途中で一人の社員がノイローゼとなり、代行者の引率と本人の帰国で 2 回往復した。会社の費用であることを考え、実質 1 か月だけ滞在した。シンガポールは街がきれいで、また訪れたいと思ったが、実現していない。

2. 維持管理業務時代

平成元年に維持管理部署へ異動した。維持管理部署はそれまでの部署の隣にあったので、多くの問題を抱えていることを見聞きしており、正直大変な部署だという思いがあった。

当時は、「事業所に従業員を採用・配属して終わり（いわゆる労務・人事管理がメイン)」という意識が強かった。実際は技術に飢えており、当時の専務がその状況を憂いて技術部門からの注入策を図ったようであるが、「技術部門から来て何ができる？」という雰囲気がありその払拭に苦労した。

事業所の新規受注営業など営業は初めてで、また入札・現説などもこの時初めて経験し、2～4 月の年度替わりの忙しさは想像以上であった。「維持管理部署は 2～4 月で一年の仕事が終わって楽でいいね。営業部門はノルマが年中厳しく大変だ」とよく言われた。

また、従業員の離職が激しく、採用もなかなかできずに連日新聞広告、ハローワーク、面接に駆け回ったことを思い出す。（私の名前は採用担当で広告欄に連日掲載されていた）

この頃はまだプロポーザルなどは少ない時代ではあったが、新規営業成績が落ち込み、営業会議で肩身の狭い思いをしたと同時に受注のための営業戦略（種まき）の重要性を実感した時期でもあった。

実際、技術部門から異動してきたものの、人事・労務の業務に追われ、技術的フォローができたとは言えない。（マネジメント能力の不足を痛感したことは言うまでもない）

維持管理現場は常に変化している。その変化に対して適切で迅速な対応が要求され、従業員もそれを期待している。会社は維持管理部門で維持されていると言われるほど現場の役割は重要で、客先の確固たる信頼を維持していくためには従業員へのきめ細かなサポートは欠かせない。

異常対応、クレーム処理、技術教育・指導等など本当に必要とするサポートができたかと今思うと確信はないが、営業・業務・技術・安全それぞれの業務を通じて永年多くの関係諸兄・諸氏にお世話になり、無事定年を迎えられたことに深く感謝したい。

【筆者プロフィール】

S22.11 鹿児島市生まれ
S45.3　鹿児島大学理学部化学科卒業
S45.4　荏原インフィルコ㈱入社　水処理プラントの開発・設計・試運転業務
S59.4　荏原エンジニアリングサービス㈱（EES）に出向
　　プラントの巡回、試運転・指導業務
H 元.4　運転維持管理部門（営業、業務、技術、安全担当）
H24.7　水 ing（株）（旧荏原エンジニアリングサービス）退社
H24.8　一般社団法人環境衛生施設維持管理業協会　事務局勤務　現在に至る

ASEE レポート　これまでの記事のバックナンバーはこちらから

43 号　１．加固　康二「運転維持管理は「清めること」から始まる」
44 号　２．大久保　隆史「大は小を兼ねないのか？」

45 号　３．新井　唯也「震災がれきに思う」
46 号　４．松田　修「ごみ焼却用流動床炉と私」
47 号　５．中島　宏「私の建設した　し尿処理施設小史」
48 号　６．眞瀬　克巳「ダイオキシンと出会って 30 年」
49 号　７．西澤　正俊「脱硝触媒のトラブル事例」
50 号　８．川原　隆「廃棄物発電に思う」
51 号　９．岩崎　臣良「過去の仕事（下水道施設工事）の思い出」
52 号　10．石崎　勝俊「海外の産業廃棄物処理施設建設・運転のこと」
53 号　11．佐々木　勉「廃棄物処理施設建設反対訴訟に携わって」
54 号　12．中村　輝夫「台湾の思い出」
55 号　13．加固　康二「“シニア“　活用のお薦め」
56 号　14．和田　勉「ガス化溶融炉の運転」
57 号　15．大久保　隆史「中辺路からの熊野本宮大社参拝の記」
58 号　16．板橋　郁夫「お世話になった上司の思いで」
59 号　17．松田　修「ASEEと仲間たち」
60 号　18．新井　唯也「原発のごみは？」
61 号　19．岡田　実「ごみ焼却施設建設とのかかわり」